四谷シモン特別ギャラリートーク

2023 年 10 月 1 日 11 時より

下瀬美術館 企画展示室にて

金子國義との出会いと別れ

人生の大先輩、金子國義と出会ったのは長沢節さんのセツ・モードセミナーの教室でした。そのとき僕は10 代でしたね。彼は僕より８歳年上でした。

クラスが１、２、３、４と４つあって、テストがありました。一番うまいのは１。彼は１で、僕は４でした（笑)。

なんとなく話が合いましたね。映画の話だとかモード、洋服の話とか。いろいろと教えてくれました。住んでるところがそんなに遠くなかったので、よく遊びに行きました。

その頃彼は部屋に額縁を飾っていたんですが、だいたいは自分の好きな世界、50 年代、60 年代の雑誌『ヴォーグ』や『ハーパース・バザー』の切り抜きとかでした。あとは、マリリン・モンローが大好きで、モンローの写真を飾っていました。

ちょくちょく遊びに行って、いろんなことを話して、いろんなことを教わりました。でもその頃、金子はまだ絵を描いていませんでした。

僕はといえば、ぬいぐるみ人形や新聞紙を千切った紙粘土の人形をつくっていました。そんなことをしながら人形らしきものの方向へ一歩一歩歩んでいました。まだはっきり自覚していなかったと思います、人形というものを。

それよりもっと前、中学生の頃かな、日展の工芸部とか伝統工芸展、人形教室の展覧会などをデパートに見に行き、ひとつひとつ吸収しました。人形のつくり方、フランス人形のつくり方という本があり、自分ではそのようにつくるんですが、うまくできなかったですね。人形教室の先生のところに習いに行ったりして、「人形って何なんだろう」って、自分の中でずっと考えていました。

人形は、伝統工芸と言われたり、トップには人形国宝、平田郷陽さんとか堀柳女さんとかがいたりして（今回の展覧会でも飾ってありますが）、これがいわゆる人形の１番だ、これ以外はないんだ、というように考えては、悩んでいました。

そんな時にたまたま入った古本屋さんに『新婦人』という雑誌がおいてあって、それをぺらぺらめくっていたら、そこに何か人の顔がぽこぽことあったんです。見ると関節人形、ハンス・ベルメールの作品の写真が載っていて、「これが人形？」って思いました。その頃はもう二十歳ぐらいになっていました。

記事の最初の方を読むと、紹介者は、フランス文学者の澁澤龍彦さんという方でした。澁澤さんの文章にはベルメールの美の標識、痙攣という言葉が書いてありました。こういう世界を初めて知ることになりました。

今までやってきたことと違い、そこに書かれているのは、「人形とは人形である」ということでした。それまで人形は置き物として、何かタイトルがついているものだと思っていたんですが、ベルメールの人形はそういうものとは違っていました。そこには関節人形ということが書いてありました。第一次世界大戦が終わって第二次世界大戦がはじまろうという時、昭和初期にすでにそういうものがあったんだとはじめて知りました。

それで家に帰って、縫いぐるみの綿とか裂とか、そういうものを全て処分したんですね。もうすでにあるじゃないか。人形は何かと考えていたけど、その答えが今日見つかった。人形とは人形だよと。僕はそう受けとりました。

正直な話、ずっと悩んでいたんです。人形、ヒトガタという文字を毎日毎日書いて。それを続けていれば、何かが現れて来るんではないかと。でも現れてくることはありませんでした。

古本屋さんで見つけた『新婦人』のその記事が、僕に、人形とは人形であると教えてくれました。革命みたいなものでしたよ。それからしばらくは人形をつくることができなくなりました。

その頃に、金子國義が絵を描き始めたんです。

ある日、金子の部屋に行くと、壁一面ぎっしりと油絵が掛かっていました。思わず「これ全部描いたの？」と聞きましたが、ちょっとショックでした。

遠くに青い空、その下にこんもりとした森、その前に木造の校舎、運動場があり、そこにぽつんと虫捕り網を持った少女が佇んでいたり、まるいボールの上に乗っかってずらーと並んでいる少女がいたりしてました。そういうものって見たことがなかったんです。ショックでしたね。「あ、すごいな」と。そういうのでびっしりと壁が埋め尽くされている。前に住んでいた人が置いていったキャンバスを使って描いたと言ってましたね。

そんなある日、詩人の高橋睦郎さんがいらして、彼も、「おー、すごいな」と。今までは額縁の中に雑誌の切り抜きかなんかを飾っていたのが、1 年で変わった。睦郎さんもしばらくじーっと佇み、「これは、澁澤さんに見せなきゃ」、確かそのようなことを言いました。「澁澤さん、知っているの？あのベルメールを紹介した澁澤さんのこと」と、僕は思わず聞き返しました。

そこから何かがはじまりました。

睦郎さんは、澁澤さんと奥さんの矢川澄子さんを連れてきたんですが、澁澤さんもずーっと佇んでその絵を見ていました。

「バルチュスだ」と言われたと金子は言っていました。でも、バルチュスと言われても、金子は知らなかったですね。そういう世界にちょっとは触れていたかもしれないけれど、バルチュスと言われてもその時は何だか訳が分からなかったかもしれないです。澁澤さんは、「バルチュスだ」と大変感激して、「展覧会をやろうよ」という話になったんです。

銀座に青木画廊という画廊があり、澁澤さんがその画廊のご主人を連れて来て、紹介したというか、金子の絵を見せたわけです。でも何となく、感じとしては受けが良くなかったですね。画廊の主人の好きな方向の絵ではなかった。そんな感じで、その日は終わりました。

澁澤さんは、ちょっと気の毒な感じでした。それでも金子は、コツコツと絵を描きためていきました。僕は、「展覧会をやろうよ。ひょっとして画廊の気持ちが変わるかもしれないじゃない」と、金子を押しました。

そこで、ある暑い日に、50 号くらいのちょっと大きいキャンバスを二人で抱えて、いろんなギャラリーを訪ねて歩きました。

最初は知り合いの日本橋のギャラリーへ。でもそのギャラリーでも正直断られちゃった。ショックなんですよね、断られると。自分が必死で描いたものを。

そこで「青木画廊に行ってみない」と提案しました。「こんな暑い日に二人して、大きなキャンバスを抱えて行ったら、人だもの、なんか感じるよ」と言って。ギャラリーはビルの２階にあるんですが、その下に行って、「僕はここで待ってるから」と言いました。

金子はキャンバスを抱えて狭い階段を 2 階に上がっていきました。しばらく降りてこなかったですね。「長いな、何の話をしているんだろう」。それは真夏の暑い日でした。キャンバスを抱えてテクテク行ったので、最初一度断ったけどなんかご主人の気持ちが揺らいだのか、やがて階段を降りる音がして、金子は嬉しそうに「やってくれるって」と。

「よかったじゃない、でいつ頃」「うん、秋だって」「秋？ 時間ないじゃない。帰ろう、帰って絵を描こう」。二人してまた電車に乗って、金子の家まで戻りました。

それからは、一人だけの戦い、自分との戦いですから、僕はしばらく遊びに行ったりしないで、「どうしいるんだろうな」と思っていました。

その頃の僕は、自分なりに関節人形をつくってたんですが、全体は、パピエ・カルトン、つまり張子でやりました。そのやり方はマネキン屋さんで教わったんです。その頃だいたいのマネキン屋さんは FRP、プラスチックでつくっていたんですが、僕が行ったマネキン屋さんは、張子の紙でつくっていました。

張子だと特殊な薬品を使わず、紙と糊でつくれるので、僕にとっては都合の良いことでした。そのマネキン屋さんで張子のやり方を覚えました。張子といっても最初は、粘土で彫刻原型をつくって、雄型、雌型をつくり、雌型に何層も紙を貼り付けました。そんなことを覚えたんです。毎日毎日そんなことをしていました。

ただ関節は自分ではつくれないので、ロクロで人形用のまるい木のボールをつくってもらっていました。人形の大体の図面をひいて、コンパスで細部を出して、それに合わせて、膝とか脛、腕とかの図面を書いてロクロ屋にもって行くと、その通りにつくってくれました。これはほんとうに職人さんの仕事です。

そうこうするうちに秋になって、金子の展覧会の時期が近づいてきました。その頃の金子の絵は、少年と少女が箱に入っているもので、赤や水色のリボンをかけていました。金子はとってもリボンが好きでした。「誰が考えたんだろう、このリボンというものは。こんなかわいらしいもの」とよく言っていました。展覧会がはじまることが決まると、澁澤さんはオマージュとして「花咲く乙女たちの桃色のスキャンダル」といタイトルで、金子の天才論を書いてくれました。そして、展覧会は朝日新聞の美術欄で大きく取り上げられて、金子は一夜にして有名人になりました。それからずっと絵を描き続けたわけですが、大変まじめな人ですから、毎日毎日描いていましたね。でもたまには遊びに行ったりして、友人たちと合流していました。

そんなある時、夜中に何かものが転がる音がする。ころころと。気になって、目が覚めた。後から覗くと、色鉛筆が机の上に並べてあって、「何やってるの」と言ったら、1 本の色鉛筆を出して、金子は「この色と合わない色を探しているの」と言うんですね。
この色と合う色を探しているというなら分かります。合わない色。これはちょっと難しいですね。音楽でいえば、合えば和音が生じますが、合わないというのは不協和音でしょうか。合わない色を探す。でも金子には、合わない色を求めさせる何かがあったのでしょう。それはちょっと僕には分かりませんでしたけれど。

また、金子の絵に、黒いスーツを着た男の人が 3 人、椅子に座っているのがあります。金子がその内の 1 人を指さして、「この顔、変でしょう」と言うんです。どういうふうに変なのか、これも難しかったですね。
江戸時代の画家・曾我蕭白に狂女という絵がありまして。僕はその時、その蕭白の絵にちょっと似ているような感じがすると思いました。うすく笑っているようでちょっと気味悪いんです。変というのは、すごく難しいです。
そういえば、友人の小説家が金子のことで、「金子さんの眼差し、目つき、変ですよ」と言ってました。

変というのは、取り方によっては、狂気の〈狂〉ですね、あと天才ですね。変は学ぶことができないです。天才も学ぶことはできない。自然とでてくるものですね。

色感も独特でした。ある日、サンゴを手のひらに置いて、「シモン、このピンクきれいでしょ」と言ったことがありました。ピンクの色の美しさを自分で納得できるまでとことんしゃべるんですね。色感に関してはちょっと病的でしたから、それからずっと、会う度にサンゴのピンクの美しさの話をしてました。それがあるとき、今度は何かというと、神社の鳥居の赤。それを金子は、「鳥居の赤、あの赤ったらない」と、またずっとしゃべるんです。何か、ひっかかったんでしょうか、そういうものが、金子にとって。

合わない色。色鉛筆をコロコロ回して合わない色を探すこと自体、普通はしないですね。
「この顔、変でしょ」。これもちょっと返す言葉が見つからないですね。変とはいったい何なのか。金子自身もやはり変でしたね、そう考えてみれば。でも、その答えを残さないままでした。

それ以外で感動したことというと、澁澤さんの３回忌、北鎌倉の裏道を通って真夏の８月５日に澁澤さんの家に行ったときのことです。緑の燃える道で、金子は１枚の葉っぱを手にとって「美しい」と言うんですね。僕はその時、「芸術家だな」と思いました。自然と出てくるんですね、そういう言葉が。なんとなく何か自然でしたね、美に対しては。

その後も毎年澁澤さんのところにお年賀に行きましたが、金子が亡くなる年の正月の ２ 日、金子は「シモン、わたし先に逝くからね」という話をして、別れました。

それから、しばらくして河出書房の出版記念パーティーで会ったときには、金子はいつものようにバレエのような仕草をして、元気でした。みんな帰っていくとき、金子はタクシーを拾って「じゃまたね」と。これが最後でした。
それからしばらくして電話が鳴って、高橋睦郎さんから、「シモン、ネコ〔金子のこと〕死んだよ」と。大切な人を失ってしまいました。